
君がくれた鍵

ペルソナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がくれた鍵

【Nコード】

N97400

【作者名】

ペルソナ

【あらすじ】

前半は簡単に学生までの自分を、後半はイケナイ恋愛です。

携帯サイトから始まった、既婚者同士の遠距離恋愛の今は・・・。

はじめに

何故か今、自分の半生を書き留めておきたいと思った。

覚えている限りを書くつもりだから、『君がくれた鍵』の本題に入るまでに長くなるだろうし、一割程は作り話も出てくるが本筋は変わらない。

特に書く意味はない。

単なる俺の自己満足だ。

自分で作った道を書く事によって、客観的に振り返りたいと思っただけである。

実は前々から、この話しは暇をみてPCに打ち込んでいる。

まだ完成していないが、まだまだ先は長い。

現時点でも原稿用紙にすると、600枚以上になっている。

読む人などいないと思っている。

それで良いと思ってる。

前にも書いたが単なる自己満足だ。

ちなみに地名や人物の名称は仮名です。

最終的には既婚者同士の遠距離恋愛がメインになる。

。文才はないので文章の構成等や、誤字脱字についてはご勘弁を・・・。

古い記憶 1

一九七一年十二月三十日午前六時

埼玉県川口市の病院で初めて外気に触れ、人の感触というものを味わった。

知っている人など数少ないが『郡司 諭くんじやうし』という人間は確かに誕生した。

一年後の一九七二年、神奈川県川崎市にある、四階建ての小さな団地の様な住まいに郡司家は引っ越した。

その当時の記憶は二つある。

一つは友達の女の子を泣かした事だった。

団地の裏には五歳年上の姉の美穂が通っていた小学校があった。

当時二〜三歳だった俺は小学校というものに憧れていて、近所の友達と放課後のグラウンドによく遊びに行っていた。

その日もいつもと同じ様に友達を二人連れ、放課後の小学校に遊びに行った。

一人は男の子で一人は女の子だ。

しかしその日は門が閉まっっていてグラウンドに入れない様になっていった。

そこで俺達は門を乗り越えて中に入ろうと、門を上り始めた。

すると先に上り始めた俺の足が、後から上ってくる女の子の手を踏んづけてしまった。

女の子は「もう帰る〜」と大泣きをしてしまったので、その日はそのまま解散した。

これが俺の中で一番遠い記憶である。

古い記憶 2

次に古い記憶は四歳の時だ。

それは川崎市から埼玉県北東部にある『瑠璃市』に引っ越す日だった。

家具や電化製品が全て出された部屋は、赤い絨毯が長かった重みから解放された事を喜ぶかの様に、我が物顔で床を占領していた。

靴を脱いで絨毯に上がった俺に「靴は履いたままで良いよ」と母が言ってきた。

日常と違う行動を取る事に子供は過剰過ぎる位に喜ぶもので、その時の俺も例外なくはしゃいでいた。

俺は何も無い絨毯の上を『これでもか!』と言わんばかりに、所狭しと走り回っていた。

こんな俺なんかに、そんな可愛い時期はあったのだ。

そんな浮かれていた俺の視界に窓の外の景色が写り込んだ。

急に寂しさが広がってきた。

(この景色はきつと二度と見る事は出来ないんだあ・・・)

幼心に妙に大人びた干渉を抱いていた。

それからはトラックに乗り込むまで、ずっと窓からの景色を眺めていたっけ・・・。

それにしても子供とは、見事な程に『単純』という回路が組み込まれている。

いざトラックに乗り、知らない道を走り始めると、さっきまでの干渉を意図も簡単に押しのけて、高揚感が支配を始めてきた。

『瑠璃市』に入り「あそこに引っ越すんだよ」と遠くに見えてきた

団地を父が指を差した時には、数時間前までいた川崎の事なんて欠片も頭になかった。

その団地は道を一本挟んで東側に市営が二十六棟、西側に県営が十二棟並んでいて、平均して一棟につき四十世帯が入る程の当時としてはかなり大きな団地だった。

ただgunnji家が入居した二十号棟は他の棟よりも一回り小さく、二十世帯からなっている棟だった。

その棟の最上階の五 二号室が新たな郡司家だ。

しかし引越し初日に事件が起きた。

古い記憶 3

十号棟が一番奥にある建物だから、トラックがそこに着くまでには当然に他の棟も、棟の間にある空き地も目に入る。

所々にブランコやシーソー等の遊具が置かれている小さな空き地があった。

子供にしては恰好の遊び場だ。

俺は二十号棟に着くと早速、五十mと離れていない空き地へと遊びに行った。

一本道なので道で迷う事はないが、団地故に、一回り小さいとは言え建物はどれも同じだ。

壁には大きく二十と書いてあったが、そんな事に気付く様な賢い子供では無かった。

俺は目印として『引越しのトラックが停まっている棟』とインプットして、母の承諾を得てから気軽に遊びに行った。

その空き地には遊具は一つしかなかったのだが、初めて見る遊具に病みつきになった。

とは言え所詮は一人遊び。

飽きるのも早かった。

俺は引越しのトラックを目印に二十号棟を目指した。

帰る時点になって初めて不安に包まれた。

もし道を間違えていたら・・・

もしトラックがいなくなっていたら・・・

もし皆が俺を置いて、どこかに出掛けてしまっていたら・・・

新居へと向かう一步一步が不安へと向かっている感じだった。

「あっ！」

俺は思わず声を上げていた。

トラックを見つけたのだ。

安心が足を軽くしたのか勢いよく走り出していた。

しかし喜びも束の間・・・

父も母も姉も見当たらなかった。

トラックがあるのに誰もいない。

古い記憶 4

全く知らない場所で一人になってしまった。
こんな時の子供に出来る事はただ一つだ。

「びえーん」

俺は大声で泣き始めていた。

もし両親や姉が近くにいれば聞こえるのではないか？

もしくは他の大人が助けてくれるのではないか？

勿論そういう考えで泣いた訳ではない。

自分は置いていかれたと思ったのだ。

ただ今にして思えばそういった考えも無きにしも非ずだった様な気がする。

現に近くを通った若いお母さんが話しかけてきてくれたのだ。
実際にはオバサンだったが、きっと若かったのだらうと思う。

「僕、どうしたの？ 迷子になっちゃった？ 何号棟に住んでるの？ お名前は？」

色々と聞いてくれたが泣き止む事が出来ずに一つも答えられなかった。

そんな時、視界の奥を何かが横切った。

それは間違いなく姉だった。

俺は駆けつこの様に飛び出し、姉の胸へとゴールインをした。

姉は優しく頭を撫で「こっちだよ」と手を引いてくれた。

俺が行った棟は実は十九号棟で、二十号棟の一つ手前だったのだ。
同日同時刻に十九号棟でも引越しがあつたらしく、そのトラックと

勘違いをして犯してしまったミスであった。

こうして無事に新居に辿り着いた俺は数日後に、幼稚園という初の団体行動を経験するのだが、そこでの初日も散々だった。

心の変化 1

『たいよう幼稚園』

俺が出た幼稚園だ。

初登園の日、母の手に握まりながら幼稚園へと向かった。

俺は寂しかった。

生まれてから肉親がない時間を過ごすのは初めてだったからだ。

幼稚園の建物に入り園長先生と挨拶を交わしてから、教室（？）へと連れて行かれた。

担任は佐々木先生という、やや年配の女性だった。

中途入園（？）だった俺は先生の手によって教壇に立たされ、自己紹介をさせられた。

とは言うものの単に名前を言うだけである。

「・・・郡司・・・諭です・・・」

そう言った途端に教室の端で見守っていた母が教室を出て行くこととした。

俺は泣いた。激しく泣いた。

涙も泣き声も収まる事を忘れたかの様に、とにかく泣き続けた。

怖かった。不安だった。寂しかった。

母の姿が見えない事が俺には辛かった。

母自信も涙をこらえる様な顔つきで、俺の視界から消え去った。

母がいなくなっただ後は先生や初めて会った友達が優しく接してくれた。

しかし泣き止む事は無かった。

さすがの先生もお手上げらしく、俺を教壇に上げたまま皆で歌を歌

い始めた。

教壇に立っている俺は皆と向き合う形だ。

俺も皆も大きな口を開けてはいるものの、出ている声のジャンルは全く違うものだった。

皆は俺を見ながらも一生懸命に歌っている。

皆の目には俺はどの様に映っているのだろうか・・・。

そう思うと急に恥ずかしくなり自然と泣き止んだ。

先生はその隙を突いて皆の列へと優しく導いた。

その後の事は覚えていないが、俺にもたくさん友達が出来る様になっっていた。

心の変化 2

あゝ・・・幼稚園と言えば勘治かんじっていう悪がきの友達がいたなあ。

一生懸命に高く積み上げたブロックをキックで壊されたり、先生からもらったご褒美シールを剥がされたり・・・。
でも楽しい友達だった。

小、中と一緒にだったけど、今頃は何をしているんだろうなあ。

勘治に比べれば俺は良い子だったな。

幼稚園で先生に怒られた事なんて有りやしないもんな。

(・・・ん？・・・あるなあ・・・)

幼稚園の庭で遊んでいる時にトイレが我慢できなくて、隅っこの方でしてた所を先生に見つけたんだっけ・・・。

まあいつか！

ただ幼稚園の年長の時、ある出来事が起きた。

心の変化 3

幼稚園で『おとまり会』という行事があった。

これは自宅から布団を親に運んでもらい、幼稚園に一泊するというものだった。

行事だから強制参加である。

当然だが俺も参加した。

その日の夕方、母と姉は自宅でくつろいでいた。

そこに誰かが尋ねてきた。

ドアチャイムが鳴ったのである。

母はドアスコープから相手を確認した。

しかし誰だか分からない。

それは訪問者の顔が見えなかったのではなく、変な物体しか映っていなかったのだ。

母はドア越しに声を掛けた。

「どちらさまですか？」

「ママ」

その声は紛れもなく、幼稚園の『おとまり会』に行った息子の声だった。

母はドアを開けた。

そこには重そうに布団を抱えた俺が立っていた。

俺の記憶には全くないが、どうやらホームシックに掛かってしまったらしい。

五歳の子供には耐えられない重さであっただろう布団を抱え、約五百mの道のりを帰ってきたのだ。

母は、ドアスコープから覗いた時に見えた変な物体とは、布団であつた事を知つた。

母は俺を家に入れると、急いで幼稚園に電話をした。幼稚園側では児童がいなくなつた事に、パニックを起こしていると思つたからだ。

しかし杞憂は稀有に終わった。

現代では考えられない事だが、俺のいなくなつた事に気付いていなかったのだ。

そのまま俺は幼稚園に戻る事もなく自宅で過ごした。

心の変化 4

この時の記憶は俺には一切ない。

中学生になってから親に聞いた事だ。

当時は単純に可愛らしい子供だと思った。

しかし今は違う。

俺は「孤独好きを偽った寂しがりや」なのだ。

それは独り言の多さが表していると思う。

独り言に気付いたのは高校一年の時だった。

隣の席の女子に言われたのだ。

「郡司君って独り言が多いよね」

俺は普通だと思っていた。

しかし他人には普通には映らないらしい。

考えてみれば小学生の低学年の頃から話し相手がいなかった。

それが独り言に繋がったのだろう。

悪い事に、ここ数年は症状が悪化している。

高校の頃とは明らかに独り言の種類が違っている。

当時の独り言は、本当に完全な独り言だった。

「よいしょ」とか「暑いなあ」などだ。

最近は架空の相手を作り上げ、話し掛ける様に独り言を言う様になっている。

現場を見られたら、誰もが驚く様な光景だろう。

しかし、今の俺には全く話し相手がないのだから仕方ない。

いや、今に限った事ではないか。

いつの日か、心から話せる人が現れるのだろうか？

ん、そんな事よりも話を進めなければ・・・。

心の変化 5

一九七八年『若葉小学校』

『たいよう幼稚園』を無事に卒園した俺は、団地の直ぐ隣にある若葉小学校に入学した。

入学式が印象的だったのだろうか？

何となく記憶に残っている。

学校の敷地自体は直ぐ隣なのだが正門とは真逆の為に、百mほど学校沿いの道を歩かなければならなかった。

入学式の時も幼稚園の時の様に母に手を引かれ、正門へと向かっていた。

正門の三十mほど手前からだろうか・・・学校の敷地内に植えてある桜並木がとても綺麗で、幼稚園の時とは違い楽しみが押し寄せてきていた。

門をくぐると直ぐに長いテーブルが置いてあり、そこにはクラス毎に生徒の名前が書かれた名札が置いてあった。

俺は自分の名札を探した。一年二組にそれを見つけた。

名札を母につけてもらい下駄箱まで連れて行ってもらった。

そこからは子供が一人で進む場所である。

母から手を離し一年二組の教室へと入った。

一番最初に飛び込んできたのは黒板だった。

黒板には桜の樹が描かれていて、その下をランドセルを背負った男の子と女の子が、楽しそうに歩いていた。

そして桜の上には「入学おめでとう」と書かれていたと思う。

その絵が凄く上手で驚いた。

しばらく見つめていたが（あっ！僕の席はどこだろう？）と現実

帰り辺りを見回してみた。

すると机の上に名前の書かれた紙が置いてある事に気付き、俺は自分の名前を探した。

席は直ぐに見つかり椅子に座ると、キョロキョロと周りの子供達に関心を持ちながらも、やはり心は黒板の絵へと向いていた。

そうして黒板と友達とを交互に見ていると、見慣れた人物の顔が目飛び込んできた。

（あつ悪がき勘治だ！！）

嬉しい様な困った様な複雑な気持ちだった。

そして担任の先生がやってきた。

正直女性というだけで名前は覚えていない。

ただ不思議な事に数カ月後に実習生としてきた女性の先生の名前は覚えている。

海老原先生だ。

たった二週間の付き合いだったのに、本当に不思議な事だった。

たぶん当時の俺には名前が面白かったのだらうと思う。

小学校一年の俺には当『当て字』なんてものは知らない。

だから『海老原』と書いて『えびはら』と読む事が、恐らくとても印象的だったのだらうと思う。

何せ高校を卒業するまでに何回か実習生は会ってきたが、一人も名前を覚えていないのだから・・・。

心の変化 6

若葉小学校は二年に一度しかクラス替えが無い。

それ故に良くも悪くも二年間は担任もクラスメイトも変わる事はない。

そして一、二年の学校での記憶は入学式しかない。

強いて言えば斉藤くんという仲良しが出来た事と、悪がき勘治が国語の時間に「ケーキ」を「ケー木」、「ひよこ」を「日よこ」と書いたこと位だろうか？

ただ家庭では問題が起き始めていた・・・。

うちの父は都内のタクシー乗務員である。

早朝から深夜まで働き翌日は「明け」と呼ばれ、前日の疲れや睡眠不足を自宅で補う日である。

分かりやすく説明すると、月水金曜日が仕事なら火木土曜日が明けで日曜日が休みだ。

今までは午前中に帰ってきていた父が、この頃は帰宅しない様になっていた。

明けになると必ず父から電話が掛かってきて、その都度母が泣いていた事をハッキリと覚えている。

俺には詳細は分からなかったが（ずっとケンカしてるんだなあ）と、幼いなりに理解をしていた。

俺が二年生になった頃、母は働きに行く様になった。

夕方の五時に家を出て、帰りはいつも夜中の零時過ぎだった。

母が仕事に行く初日、俺は五階のベランダから母を見送り号泣していた。

姉は五歳も年上だが、それでも中学一年生である。

小学二年生の弟の面倒を寝るまで見なければならぬのは、凄く大

変だっと思うと思う。

夜に仕事をしている母を不思議に思った事は無いが、どんな仕事をしているのか聞いても答えてくれなかったのは、さすがにこの歳になれば想像するのは難しくない。

昔の親の年齢に近づくに連れて、親も大変だんだなあと改めて思う様になった。

心の変化 7

母が仕事をする様になってからしばらくすると、父がいない時に限って家には知らないおじさんが来る様になっていた。

おじさんは名前を伏せていたが『小林』という名前だという事を俺は知っていた。

おじさんと母と俺の三人で旅行に行った時、受付の人がおじさんをそう呼んでいたのを俺は聞き逃さなかった。

おじさんはよく家に泊まる様にもなった。

そんな時に限って何故か俺は夜中に目を覚ましてしまう。

人としての本能が働いていたのか、それとも抑えていたであろう母の声が漏れ聞こえたのかは未だに分からない。

ただ夜中に目が覚めてしまうと、それから一人で寝るのは怖がりの俺には無理な話だ。

俺の隣では姉が寝ているが、寝ている人間の横にいても安心は出来なかったで、そんな時は必ず母を呼びに行っていた。

呼びに行った時、必ず母はいつも裸だった。

同じ様に裸のおじさんと一緒の布団で寝ていた。

子供の俺に理由など分かるはずもない。

母を起こすと俺を先に部屋へと行かせ、母はきちんとパジャマを着込んでから添い寝をしてくれるのだった。

心の変化 8

この頃の母の怒り方はヒステリックだった。

ただ日常茶飯事ではなく、あくまでも意味があつて怒る時だけなので、俺も姉も受け入れるしかなかった。

と言つても現代の様にタバコを押し付けたり絶食させたり、下手をしたら死に至らしめる様な事ではない。

布団叩きで力一杯に何度も叩かれるのだ。

しかも洋服の上からではなく、素肌が出ている所を狙つて。

終わった後にはビッチリと痣が出来ている。

まるで陸地が貧相な世界地図の様だった。

当然しばらくジンジンとした痛みも残る。

抵抗の出来ない小二にとっては、何よりの恐怖だった。

それでも耐えるしかなかった。

心の変化 9

少し話は逸れてしまいが、現代では子供への虐待死が話題に上がる時がある。

虐待をしている親は分かっているだろうか？

どれだけ子供が怯えているか・・・

どれだけ痛がっているか・・・

どれだけ自分自身を責めているか・・・

どんなに苦しい思いをさせられても「親だから」と強引に納得させているのか・・・

駄めという愚か者がいるが考え直して欲しいものだ。

あくまでも持論だが「何事も度を越してはならない」と俺は思っている。

どんなに良い長所も度を越せば短所になる。

例えば「優しい」は「甘い」、「清潔」は「潔癖症」という様に、言葉は適切ではないかもしれないが、やはり度を越してはならないと強く感じる。

虐待をしている親がもし相手の親や会社の上司から同じ仕打ちを受けたとしたら、果たして「駄め」として捕らえる事が出来るのであるのか？

会社なら間違いなく辞めてしまっただろう。

しかし子供は子供を辞める事は出来ない。
だから今一度、親としての自分の行動を振り返り、虐待と呼ばれる

事をしていないか確認して欲しいと願うばかりだ。

話がだいぶ逸れてしまったが、とにかく我が家は布団叩きだった。俺は叩かれながら思っていた。

（何だよ！ 自分なんか裸でおじさんと一緒に寝てくせしてさ！
今度叩かれた時は絶対にそう言ってる）

しかし一度も言った事は無かった。

裸で寝ている意味は分からなかったけど、子供心に言うてはいけな
いと感じていたのだ。

こうして三年の始業式を迎えた。

心の変化 10

三年のクラス替えが発表された。
この時の担任は砂賀先生だった。

クラスメイトは女子の青木利恵ちゃんと加賀谷のりこちゃんしか覚えていない。

利恵ちゃんとは芸能界に入れる位に可愛いにも関わらず、俺なんかと両思いだったので、毎日の様に利恵ちゃんの家遊びに行っていた。三つ四年生はその位しか記憶に無いのだが、砂賀先生の言った言葉を今でも覚えている。

それは何かの授業中だった。

「皆はまだ子供だから今から先生の言う事は分からないかもしれない。でも言うておきたい事があるんだ。皆・・・時間は大切に使うんだぞ・・・。一九八×年の×月×日×時×分という今の時間は、もう二度とやってこないんだ。そして自分の時間は限られている。自分の時計がいつ止まるかなんて誰にも分かりはしない。だからどんな時も今を大切に使うて欲しいんだ。」

最後の方は俺なりにアレンジしてしまったが
先生の言いたかった事と大差は無いと思う。
ただこの言葉は心に残った。

「今」と思った瞬間でさえ、直ぐに過去へと流れ去ってしまうのだ。
こんな年齢で時間の貴重さを知ったのに、今の俺は時間を誰よりも無駄に使っている。

だから余計に覚えているのかもしれない。
あつ・・・四年生の記憶がもう一つだけあったな・・・

心の変化 11

そして授業参観の直前の休み時間。
友達の父親達が続々と教室に入ってくる。

「あれは誰のお父さん？」

そんな声が間断なくあちらこちらから耳に入ってくる。

（早くお父さん、来ないかなあ・・・）

俺は待ちどうしかった。

しかし父はなかなか来ない。

（ひよっとして寝てるのかなあ・・・早くしないと授業が始まっちゃうよ・・・）

もちろん授業中に入る事も全く問題ないのだが、俺としては開始からいて欲しかった。

成績が良いわけでもなく、手を挙げる事すらないかもしれない。

それでも父に見ていて欲しかった。

俺の心の焦りが時間にも伝わってしまったのだろうか？

時計も授業開始のチャイムを鳴らす事を急ぐ様に、あっという間に休み時間は終わり、授業が開始された。

父はまだ来ていない。

（でも大丈夫。授業は四十分もあるんだ。終わるまでには絶対に来るさ。）

しかし無常にも時間は過ぎていく。

遅れてきた人がドアを開ける音が響く度に後ろを振り返ってみる。
父ではない。

何でもない時でも振り返り父の姿を探す。

やはり父はいない。

それでも待った・・・ずっと待った・・・。

必ず来てくれると信じてずっと待った。

授業も残り五分となったその時、「ガラガラ」とドアが鳴った。

心の変化 12

（やったあ！ お父さんだあ。）

そう思いながら振り返ったが、友達のお父さんだった……。そして流石に諦めた。

その時の授業終了のチャイムは何だか凄く寂しかった……。

学校が終わってから急いで家に帰った。
父は珍しく家にいた。

「何で今日は来てくれなかったの？」

「行っただけじゃなかったぞ」

「四年二組だよ？」

「ちゃんと二組に行っただよ？」

「正門から入った？」

「ああ」

「一番奥まで行っただ？」

「奥？ 門を入ったら直ぐに四年二組って書いてあったから、そのクラスにいったぞ」

「……朝、ちゃんと行っただでしょ？ 四年二組は二つあるよって・

・・
」

「そうだったけ？」

「・・・」

これ以上は無駄だという事が幼心にも分かったので、それ以上の追求はしなかった。

あれだけ何度も忠告したのに聞いていなかったなんて、あまりにも酷いと思った。

「仕事明けたつたから起きれなかった」と言われた方がよっぽど良かった。

ただ今にしてみれば父は間違えたにしろ、本当に来たのであろうかとも思う。

実はちゃんと話を聞いていて「これは使えるぞ」と思い、授業参観を口実に家を出てパチンコにでも行っていたのでは・・・？

そこまで疑いたくは無い。

ただ流石にもう時効だ。

本人に聞いてみようか・・・？

しかし今となつてはそれも出来ない。

父はいないのだ・・・。

心の変化 13

あつ！勘違いしないで欲しい。
死んだわけではない。

俺が結婚してから両親は離婚した。

そして父は再婚してラーメン屋を開いたが失敗した。

残ったのは奥さんと借金だけだ。

そして借金取りから逃げ回り姿を眩ませてしまい、今現在も行方不明なのだ。

父の実家に聞けば或いは居場所を知っているかもしれないが、変に首を突っ込んで巻き添えを喰うのも御免なので連絡は取っていないし、今後も取る予定すら無い。

母はまだしも姉すらも「亡くなった時には流石に連絡くらいはあるだろうから、放っておいて良いんじゃない」と言っているし、俺も全くの同意見だった。

こんな感じで三丁四年生を終え五年の始業式を迎える。

心の変化 14

始業式の日

クラス替えの発表があった。

担任は新任の深沢先生という男性だった。

このクラスで仲間が多く出来た。

麻生、ゲゲ、はんぺん、平野、まっちゃん、

たっちゃん、大野、柴ちゃん、まさ・・・後は出てこないかな・・・。

そして好きな人も出来た。

吉田美恵と小林君江。

三年の頃に仲良かった利恵ちゃんは席替えと同時に疎遠になっていった。

吉田は俺から気に入ったが君江ちゃんは向こうからアプローチがあり、気になる存在へと変わっていった。

しかし特に進展は無かった。

俺が五、六年生の時は漫画の『キャプテン翼』が流行っていた。

それと同時に初期のファミコンが発売されたのもこの頃だ。

その為に休み時間はサッカー、放課後はやはりサッカーかファミコンをやっていた。

凄く楽しい時期だった。

しかし家庭では急展開があった。

あれは五年の時だったかな・・・。

俺は団地の隣の空き地で友達と珍しく野球をしていた。

その時、空き地の前の道を父が通った。

俺は当然、声を掛けた。

「どこ行くの？」

「諭・・・お父さんはもう帰ってこないからね・・・」

「何で？」

「お父さんとお母さんは仲が悪いでしょ？ だから別々に暮らす事にしたんだ・・・」

「もう会えないわけじゃないんでしょ？」

「うん」

「そつか！ なら仕方ないね。分かった」

「じゃあね」

父は寂しそうに去って行った。

実際に家庭の中はグチャグチャだった。

父と母は顔を見合わせる度に激しくケンカをしていた。

そんな両親を見ながら（そんなにケンカをするなら別々に暮らせば良いのに・・・）と常々冷めた感情を抱いていた俺は、父が去っていく姿を見ても心は痛まなかった。

幼稚園の頃に母の姿が見えなくなって大泣きしたのが夢かと思える程の親不孝な子供だ。

（しかし今はあの時以上に親不孝だな）

そんな家庭の事情を「よくある話し」と受け止め時は過ぎ、六年生の夏休みになった。

心の変化 15

まっちゃんの家族が栃木県の日光市にキャンプに行くというので、仲良し同士で集まり便乗する事となった。但しキャンプ場以外は完全に別行動だ。

学校行事以外では初めての友達同士の旅行だったので、楽しみでしようになかった。

あの時のメンバーは・・・俺、まっちゃん、ゲゲ、たちちゃん、平野、はんぺん・・・後もう一人いた気もするが忘れてしまった。確か行った場所は中禅寺湖の畔にある千手ヶ浜せんじゅがはまキャンプ場とかいう名前だったと思う。

今でもあるのだろうか・・・？

それにしても色々とあって楽しかったあ。

行きは「いろは坂」でバスが故障して止まっちゃったから、荷物を背負って歩いて上ったんだっけなあ・・・。

そうそう、修学旅行か何かで来ていた高校生達と、ケンカになったっけ。

と言っても、もちろん殴りあったわけじゃなくて、単なる口げんかに毛が生えた様なものだった。

あっ！もう一人思い出した！順がいた。

でも特にエピソードは無いけどね。

ただ何と言っても帰りが印象的だったなあ。

最寄の駅に着いた俺達は歩いて自宅に戻ろうとしていた。

その時いきなりゲゲが「あっ！」と言ってジュースの自動販売機に走って行き、ボタンを押した。

すると、お金も入れてないのにジュースが出てきたんだよね・・・。

「良いなあ。俺ならこれが飲みたいなあ」

そう言っただけで俺も何気なくボタンを押したら「ゴトン」といって、またジュースが出てきたから凄くビックリ！

それから皆も押しまくって、結局は一人三本ずつただでもらえた。それでもまだ押せば出てくる状態だったが、ゲゲが「そろそろ止めよう」と言ってきたので従っただけだった。

もし誰も止めなければ、無くなるまで出続けたのか、今もって不思議である。

あと六年生と言えばあれもあった。

深沢先生への嫌な記憶だ・・・。

心の変化 16

俺は人見知りをするので、先生と普通の会話をする事が出来ない子供だった。

それでも俺なりに何とかしようと頑張っではいたし、先生も俺にちよっかいを出してくれるのだが、やはりうまく返せなかった。

そんなある日の雨の昼休み。

キャンプに行ったメンバーが深沢先生を机に押し倒しすぐり始めた。

先生は何度も跳ね除けるが、友達はめげずに向かっていく。

俺も勇気を出して一度だけくすぐりに行ったが、あっさり跳ね除けられてしまった。

でも俺は嬉しかった。

深沢先生に限らず先生と呼ばれる人とこんな風にはしゃいだのは、初めての事だったからだ。

（今日の俺はいつもと違うな。これを機に先生と仲良くなれるかもしれない）

そう感じていた矢先だった。

流石に多勢に無勢で先生がひるんだ。

（ここで俺も飛び込んでいこうか・・・）

俺は迷っていた。

しかし慣れきったわけではない俺は、先に順を行かせて続けざまに行こうと策を練った。

そして「よし！順！行けえ！！」と順の背中を押して、先生の上に

ダイビングさせた。

次は俺の番だ。

これでまた一歩、先生との距離が縮まるぞ、
そう思った矢先だった。

「郡司！何でお前は自分から来ないんだ！そんなんじゃダメだろ！
！」

怒鳴られた。

教室内が静まり返った。

俺は教室を出て次の授業が始まるまで、ずっとトイレの個室に入っていた。

トイレの中で何故か過去を思い出していた。

家族で出掛けた記憶は二つしかない。

一つは四歳の頃だったと思うが新潟の祖母が亡くなった時。

そしてもう一つは六歳の頃だと思う・・・伊豆への家族旅行だ。

これ以外は旅行は勿論の事、買い物や外食すら家族の思い出は無い。
土日は何故か父がいなかった。

いたかもしれないが遊んだ記憶が無い。

友達の田中が日曜日の度に父親とキャッチボールをしているのが、
たまらなく羨ましかった。

そして母は昼間は働く様になっていた。

姉はいるが五歳も年上だと相手にしてくれない。

これが姉ではなく兄であったり、兄と妹、姉と妹という関係なら、
きっとまた違っていたのだろう。

よく考えたら一人ぼっちだ・・・そう感じてしまった。

俺はただ調子を合わせれば良い・・・

笑っていれば良いだけの存在なんだ・・・
そうすれば、もう一人ぼっちじゃなくなるんだ・・・

この時を境に俺は本当の自分を出せなくなってしまったのだ。
こうして小学校六年間は終わっていった。

二人の恩人 1

一九八四年『瑠璃中学校』

俺は中学校に入学をした。

一年二組で担任は高木先生だった。

小学校からの友達の秋山と同じクラスになった。

新しい友達も出来た。

成なると見原だ。

そして女友達も出来た。

西山順子、田中雅美、藤谷紀子、山本直子、そして相田清子……。

相田は可愛かった。

とにかく可愛かった。

今まで出会った中でダントツの可愛さだった。

そんな相田が俺を好きになってくれたらしかった。

俺も相田が好きだった。

よく電話をしてくれたり、家に遊びに来たりしてくれていた。

でも俺が子供だった。

互いに想いを打ち明ける事無く、俺の下らない性格のせいで気まずくなり、その恋はたった数ヶ月で終わりを告げた。

あの時に今の俺がいれば……そう思うのは浅はかだろうか……？

相田に出逢う前にも好きな人はいた。

幼稚園の時の白石さん。

小学校低学年の時の菅原祥子ちゃん。

高学年の青木利恵ちゃん、吉田さん、小松さん……。

ただ「初恋はいつ？」と聞かれれば、間違いなく答えるだろう。

「中一の時の相田さんだよ」と・・・。

あの頃の事を考えると、今でも胸がときめいてしまつのはみつともないかなあ・・・？

兎にも角にも素敵な人だつた。

過去に戻るのなら、必ず中一に戻るだろうな・・・。
そんな感じで中一は終わり・・・

二人の恩人 ポエム・・・変化と不変

この間

景色を眺めに行った

見るものの全てが大きく見えた頃から

空を眺める事も忘れていた頃まで過ごした場所

暮らす人が変わった今の場所からは

決して遠くないのに

今まで辿ろうとはしなかった

ゆっくりとしたペダルの動きを

いくつもの思い出が追い抜いていく

「変わらない」と「変わった」を

何度も使い分けながら

最後に行き着いた場所は

初恋の相手の住んでいた団地だった

よく今でも彼女を思い出す

声 顔 しぐさ 飼っていた猫の名前

当時に知った彼女に関わる全ての数字さえも・・・

彼女の積極さで

手も握れない様な付き合いは始まったけど

僕の情けなさで直ぐに終わりを迎えた

あの頃に今の僕がいれば
今も隣は君だったと思えてしまう

だってね

理想を聞かれても答えられないけど
必ず君が浮かぶんだ

今は何をしているのだろう

誰に笑顔を渡しているのだろう

もう二度と逢う事はないかもしれない
そう思いながらポストのネームを確かめた

あの頃と変わらない文字が並んでいた

自分でも気付かない内に
胸に手を当てていた

何も考えずに言葉が出た

逢いたい・・・

たとえ心の中の君と
かけ離れてしまっても

素直に逢いたいと願う

二人の恩人 2

何だろう・・・

中学一、二年は後悔ばかりが多いせいか、なかなか字が埋まってい
かない・・・。

だから淡白に終わらせます。

中二なった俺はバスケットに入った。

一年の時はサッカー部に入ったが、嫌いな奴ばかりだったから直ぐ
に行かなくなってしまうたからだ。

ちなみにバスケット部にはゲゲ、麻生、よっちゃん、久泰、もっちゃん・
・・・がいた。

下の四人は部活に入ってから出来た友達だ。

取り合えず二年生は何事も無く過ぎて行った気がするので、このま
ま三年生に突入！

二人の恩人 3

中学三年

俺には恩人が二人できた。

一人はヨッパだ。

常に鼻と頬が赤く染まっっていてまるで酔っ払いみたいなので、そんなあだ名がついてしまった。

と言っでもれつきとした理科の先生である。

この先生の一言が俺を少しだけ変えた。

理科の授業の時、科学反応式みたいな事を行った。

初めて習う事だったので最初は先生が例題を黒板で説明しながら解いていった。

次に二問の問題を出してきた。

当然生徒を名指しして黒板に書かせる為だ。

ただ一問目は非常に簡単な問題だった。

学年ワースト十に入る俺ですら簡単に解けてしまう。

何しろ先程の例題と全くと言って良い程に変わりが無いのだから、ちゃんと説明を聞いていれば悩む必要なんて全く無い。

しかし二問目は少なくとも俺には難問だ。

（もし指されるとしたら一問目が良い）

そう考えていた時、「一問目は星名な」と、俺と同じ班の女子を指名してきた。

ホッとした。

まさか同じ班で二人は指すまいと思っていたからだ・・・が！期待は裏切られた。

「問題目は郡司な」

二人の恩人 4

（ハア〜？ 何故よりによって俺なん？ 同じ班って有り？ そもそもこの班にはクラスのスッスリーが揃ってるじゃん！ 俺じゃなくても良いじゃん！）

そうは思ったが直ぐに別の考えも浮かんだ。

（そっか！スッスリーに聞けば良いんだ！ ではでは早速・・・）

そして皆の方を見た。

すると皆で星名が指された一門目を、がむしゃらに解き始めていた。そうする事によって、俺との接触を避けている様であった。

彼等にとっても二問目は難問なのだ。

しかし俺も負けじと声を出す。

「ちょっと・・・こっちも助けてくれないかなあ？」

誰も返事が無い。

「ねえ・・・小川・・・」

「・・・ん？・・・あっ！ちょっと待ってってね。星名のが終わったらね」

（なるほど・・・そうやって時間を稼ぐ気だな・・・）

現に星名の問題は既に解けていた。
今は皆で何度も確かめ合っているのだ。

そして皆の狙い通り時間が来た。

「じゃあそろそろ黒板に書いてくれるかあ」

結局俺の問題は何も分かっていない。

俺は不安を少しも隠す事なく、黒板へと向かっていった。

字ばかりの黒板が本当に黒い板となって、自分に迫ってくる様だった。

黒板の前に辿り着いた。

流石に星名の方からはチョークが黒板という楽器を鳴らしているかの様に、軽快な音が流れてくる。

俺は成す術もなく呆然としていたが、取り合えずは（ここまでは間違っていないだろう）と思う所まで書き進める事にした。

しかし情けない。

自信の無さが文字にまで現れている。

これが波線を引く問題ならば満点だったろうに・・・。

「！」

しかしここで閃いた。

答えへの突破口を発見したのだ。

それが分かかってしまえば、恐れる事など何も無かった。

星名に負けない程の音色が、俺のチョークから流れ始めた。

これには星名もビックリしていた。

目を真ん丸くして（何で郡司にこの問題が出来るの？）と、あからさまな顔つきで見てきた。

結局、星名と同時に書き終わった。

そして黒板と俺を見比べながら、未だに目を見開いていたので

「俺、どこか間違ってる？」と言ってやったが、相手は黙っていた。
意地悪いと思ったが気分は良かった。

二人の恩人 5

その授業が終わった後、ヨツパに呼び止められた。

「郡司・・・何で二問目をお前にやらせたか分かるか？」

「分かりません」

「お前なら出来ると思ったんだ。お前はやれば出来るんだぞ。何故にやらない。現にあの問題を一発で解いたのは、俺が教えてる生徒の中ではお前だけだぞ。もっと自信を持ってちゃんと勉強をするんだぞ」

そう言つてヨツパは去つて行つた。

俺は単純なのだろうか？

やる気を出させる為の決まり文句とはいえ、実際に難問を解いた直後に言われると、ちよつと真剣にやってみようかなという気になつてしまった。

しかし勉強の仕方が分からない。

塾にも行っていないければ、全ての科目の基本も分かっていない。自信を持って言えるのは九九位のものだ。

そんな時にもう一人の恩人の粕谷一範が登場するのだ。

二人の恩人 6

ただ何を隠そう粕谷も理科では同じ班だ。

という事は俺が問題を悩んでいる間、一生懸命に星名の問題を解いていた一人だった。

その粕谷がヨツパの去った後、俺に言ってきた。

「郡司、さっきの問題よく出来たね。俺は分からなかったよ。」

「いやいや、単なる偶然だよ。」

「ヨツパとの話・・・聞こえちゃったんだけどさあ・・・俺も郡司はやれば出来ると思うよ。もしやる気があるなら協力するよ」

「どんな風に？」

「俺の行ってる塾から問題用紙をコピーして持ってきてあげるよ」

「あつ！それ・・・出来るならお願いしたいな・・・」

「よし、任せておいて」

それから粕谷は約束通りに、塾の翌日は必ず十枚から三十枚の問題用紙を、持ってきてくれる様になったのだ。

それ以来、俺は勉強をする時間がどんどん増えていった。

成績も少しずつだが上がってきた。

成績が上がれば勉強も楽しくなる。

良い循環ではあった。

しかし受験を控えた一ヶ月ほど前から、俺の中に粕谷に対しての不信感が現れてきた。

いや・・・それは言葉が違う。

このまま粕谷がいたら本当の自分が出てきそうで怖かったのだ。

この頃の本当の自分がどんな物なのか正直分らないが、自分の領域に入られそうで拒否反応が出てしまっていた。

だから俺は粕谷とあからさまに距離を開けた。

それでも粕谷は変わらずにプリントを持ってきてくれた。

本当に良い奴だった。

凄く励みになっていた。

でも言葉どころか態度にすら感謝を表す事が出来ずにいる自分が腹立たしかった。

最初は怖くて粕谷を避けた。

でも後半は傷つけたくなって粕谷を避けた。

どっちにしろ俺のわがままだった。

自分が傷つくのを恐れて、人を傷つけているとも分からずに。

こうして高校入試に突入した

二人の恩人 7

高校入試。

この当時は偏差値があつた。

俺の受ける隣の『県立埼玉北高校』は偏差値四十八の、なかなかランクの低い高校だ。

しかし落ちる訳にはいかなかった。

私立には受かつていたが経済的に負担を掛けたくなかった。ただそれ以上の理由があつた。

何せ埼玉北高校はあの相田清子も受けるのだ。

頑張らなくてはいけなかった。

実は三年間ずっと相田を忘れられずにいた。

そして互いに合格したら、絶対に告白をしようと考えていた。

入試は二日間あり初日は筆記で二日目は面接だった。

筆記はその日の夜に地元のテレビ局で答え合わせをしてくれる。

面接前に瑠璃中の皆と自己採点の結果を発表したら、断トツで俺が一番だった。

とは言うものの二百満点中、百四十だから大した事はない。

取り合えず面接も順調に終わった。

一週間が過ぎ合格発表も終わり、瑠璃中は無事に皆が合格した。

そして更に日が流れ卒業式も終わった。

俺は窓の外を眺めながら四歳の頃の川崎からの引越しを思い出していた。

（あの時もこうして景色の見納めをしたんだっけなあ・・・小学校を卒業する時は忘れていたなあ・・・考えてみれば学年が変われば窓の景色も変わるんだよな・・・これからは学年の最後日に必ず外

の景色を見よう)

そう思っていた時

「郡司・・・元気だな・・・」

粕谷だった・・・。

「ありがとう・・・粕谷もな・・・」

最後の最後まで粕谷に感謝を伝える事が出来なかった。

この三年後に自動車教習所で粕谷に会うが、何のわだかまりもなく話す事が出来た。

これを逃したらダメだと思い粕谷に正直に全てを話し感謝を述べようと思ったが、粕谷が急いでいた為に言えなかった。

この日以来、もう二十年以上会っていない。

もう二度と会う事もないかもしれない。

だからこそ思う。

感謝している人がいるのなら例えばそれが身内だったとしても、照れずに伝えたほうが良い・・・。

こうして失敗も、得たものも多かった中学生生活は幕を閉じた・・・

福田洋子（ふくだようこ）

1

一九八七年の四月。

俺は埼玉北高校に入学をした。

クラスは一年四組で担任は『富田多計志』先生だった。

瑠璃中出身のクラスメートは須賀慎太郎だ。

彼とは小学五、六年の時もクラスメートだったから、全く知らないというわけじゃないが、俺はあまり好いていなかった。

このクラスで新しく出来た一番の仲良しは有江君だろうか。

それ以外なら男子は相吉沢、池田、明彦、はなちょ、女子なら浜田、松本、きけちゃん・・・それから洋子・・・。

入学式終了後クラスに戻った俺達は、慣れない顔ぶれのせいかな大人しかった・・・と書きたい所だが、実際は約一名騒いでいた。

俺は一番廊下側の前から二番目の席だった。

俺の前は『菱沼』、俺の後ろは『矢部』と共に男子だった。

俺の左斜め前、いわゆる菱田の隣の女子は『浜田』、俺の隣の女子が『福田洋子』で俺の左斜め後ろ（矢部の隣）の女子が『松本』だった。

斜め前の浜田さんがチョクチョクと振り返り、福田さんや松本さんとおしゃべりしていた。

この時はまだ同じ東中出身の松本さんしか名前を知らなかったのので（松本さん達うるさいなあ）と感じていた。

しばらくすると担任の先生が入ってきた。

「俺の名前は富田多計志だ。初めて担任を持つ事になった。皆と同じ一年生みたいなもんだからよろしくな。」

そんな辺り障りのない紹介をしてから、出席を取り始めた。

出席を取りながら生徒一人一人の顔を確認していく。
それが終わる頃になってやっと俺は、女子三人衆の内の二人の名前を知った。

（ふん．．．隣の席は福田さんって言うんだあ．．．未来の事は分からないからなあ。ひよっとしたらいつかはこの人と付き合ってるかもね）

そんな事を考えていた。

今にして思えば馬鹿な事を考えたもんだ。

この時にそんな事を考えなければ、今は全く違っていたかもしれないかった。

高校生活一週間後、いつの間にか俺も浜田さんや福田さん、松本さんと話す様になっていた。

内容の無い話ばかりだが、それぞれ個性があって面白かったし、何しろ俺自身も異性を気にしだす年頃だ。

女子と話をしていて楽しく無いわけがない。

当然女子だけではなく菱田や矢部とも話す様になり、高校生活も楽しみが増えてきた。

（そういえば今日から部活の体験入部が始まるんだよなあ。どこにしようかなあ．．．）

俺は悩んでいた。

（やっぱり中学の頃にやっていたバスケット部が妥当かな。でも才能がないしなあ．．．。それとも一番好きなスポーツのサッカー部にしようか。でも経験者が多いだろうからハンデがあるしな．．．ここは東中出身者が多く入ろうとしているバレー部にするか。経験者も

少なそうだし。でも興味が無いから続かないかも・・・)

どれも決定打に欠けていた。

取り合えず初日は東中の皆と一緒にバレー部に行ってみるか。
そして放課後、体育館へと足を運んだ。

体育館の半分をバレー部が使い、残りの半分はバスケット部が使っていた。

俺はバレー部のコートにいたが、バスケット部の方ばかりを見ていた。

それはバスケットがしたかったというよりも、マネージャーから目が離せなかった。

先ずクラスメイトのきけちゃんが目に入ってきた。

次に隣の席の福田さんだった。

更に視界に入り込んできたのは何と、相田清子だった。

やはり俺は単純だった。

清子を見つけた事によって、次の日からはバスケット部に行くようになった。

これが運命の分かれ道だったなんて、当時の俺には当然分かるはずは無かった。

こうして俺はバスケット部に通う様になり、まだ会話はしてないが、清子との距離が縮まった錯覚をしていた。

しかし清子は本入部をしなかった。

仮入部の期限が終わると同時に顔を出さなくなってしまった。

ただ俺はバスケット自体は嫌いじゃなかったもので、そのまま本入部をする事にしたのだ。

そしてGW前に清子にラブレターを書いた。

「あの頃よりは大人になりました。また戻りたいのですが・・・」
的な事を書いた様な気がする。

そして至って古典的だが放課後に手紙を下駄箱に入れた。

数日後に下駄箱に返事が返ってきた。

答えはダメだった。

簡潔に書くと「私ばかりを見るのではなく視野を広げて欲しい」との事だったが、なるべく傷つけない様に書いてくれたのが読み取れた。

俺の清子への思いは完全に断ち切られた。

高校生活初の間テストが迫っている時期になった。

この時の俺は粕谷とヨツパの事を考えていた。

高校に入ってから俺は勉強に対する姿勢が以前とは全く違っていたからだ。

普通の授業は当然クラスメートと受けるのだが、数学と英語だけは隣のクラスと合同だった。

ただ同じ教室で二クラス一辺に受けるのではなく、A・B・Cと三つのクラスに分けられていた。

分ける基準は成績順でAが良いクラスだ。

これは学期毎にクラス替えがあるので、頑張れば上のクラスにいけるし、手を抜けば下がってしまう。

一年の一学期目は入試の成績で分けられていたが、何とこの俺が両教科共にAクラスに入っていた。

中学ではワースト十の俺が、信じられない快挙である。

これは俺の努力の賜物なのか、北高校のレベルの低さなのかは分からないが、この事が俺を勇気付けた事だけは確かだった。

これは拒否られながらも助けてくれていた粕谷のおかげである。本当に感謝しきれない。

それと同時にテスト勉強に向かう時には、ヨツパの言葉を思い出していた。

前にも書いたが「お前はやれば出来る」と言われた事だ。しかし実はもう一つあった。

個人的に言われた事ではなく、クラスの皆に向かって言った言葉だった。

「中学というのは地域で決められるから、勉強の出来る人と出来ない人の差は激しい。ただ高校は違うんだ。似たり寄ったりの成績の人が多い。それでもやはり差はあるけど中学程ではない。だから今自信を失う事はない。高校に行ってから頑張れば必ずトップクラスに入れるんだ。だから高校では絶対に手を抜くな」

福田洋子（ふくだようこ） 3

単純で落ちこぼれの俺には魅力的な言葉だった。

そしてその言葉を信じた。

中学ではテスト前でも勉強しなかった俺が、高校ではテスト前に限ってだが十時間は勉強する様になった。

そのおかげか高校生活では「授業中は寝ているのにテストでは良い点を取れる人」と、やや皮肉めいた台詞をクラスメートに言われた事もあった。

それに天邪鬼な俺は授業中に指されたら、分かっている事でも答えはしなかった。

それは先生も知っていた。

だから三年の三学期に英語を担当していた学年主任から

「郡司は何で授業態度が悪いんだ？ いつも寝てるし指しても答えないし……。通信簿の英語の成績は一年からずっと九でしょ？ 担当した先生達は皆言ってるよ。郡司は授業態度さえ良ければ十なのに……。て」

そんな風に嘆かれた事もあった。

それには俺なりに理由があった。

一つは一生懸命な姿勢を見せるのが大嫌いだったのだ。

『やる時はやるが人前ではやらない』

『失敗しても笑って見せるが、一人になった時に激しく泣く』

だから授業をまじめに受けていれば『それなりにテストが出来るのは当たり前』と思っていた俺は、授業をまじめに受けるつもりはなかった。

この考えは未だに根強く残っているから性質が悪いと思う。

それからもう一つの理由は英語に興味がなかったというか限界を感じていた。

経済的な理由で進学する予定の無かった俺は、（中学、高校の授業で習う程度では英語など話せやしない）と諦めていたのだ。

だから未だに英語は話せない。
ゆっくり話してもらえば漠然とした意味は分かるが、あくまでも簡単な日常会話だけだ。

特にグローバルな仕事をしているわけでもない今の俺には、尚更に必要の無い事だった。

かなり話は飛んでしまったが粕谷とヨツパのおかげで、高校初の間テストはそれなりに納得のいく結果に終わった。

期末テストも夏休みも終わり秋を迎えた。

勉強も部活も充実していた。

残るは恋愛だけだった。

好きな人はいた。

相田清子以来で実に三年ぶりだった。

その人は山本律子といって、バスケット部のマネージャーだ。

今ならばガッキーに似ていると思う。

どうも俺は背が高く、綺麗なロングヘアーで、勉強の出来る女性に弱いらしい。

清子も律子さんも例外なく当てはまった。

俺は常々思う事があった。

「好きな人には告白しよう。告白せずに後になってから実は両想いだったと分かるのは、何だか寂しい気がする。それならどんな結果であれ、どれだけ無謀であっても、必ず告白しよう」

その考えがあつたから律子さんに手紙を書き、直接渡したのだ。

結果は清子に続きダメだった。

何となく分かっていたから、ショックではなかった。

（思うほど好きではなかったのかな？）と、自分でも戸惑いを覚えたくらいだ。

ただこの間、十四年ぶりに律子さ与会った。

それ以来律子さんを思う時間が増えた。

やはり大好きだったのだと実感をした。

とりあえず一年生は終わりを告げる。

俺は一年を振り返ってみた。

やはり友と呼べる友はいなかった。

もちろん付き合いはあるがそれは学校生活の中だけであって、プライベートとなると皆無だった。

俺自身が選んだ道でもあるが、環境にも多少なりの問題があった。

やはり一番仲良かったのは何と言っても部活の仲間だ。

ただ一年の男子部員は全員で六人だったが、俺以外は同じ中学校の出身だった。

尚且つ学校を中心に住んでる場所も全く真逆だった為に、ワイワイと帰る皆と別で、一人で帰らねばならなかった。

プライベートで会うにしても自転車で四十分は掛かるし、友達の家は駅から遠かったのも、なおさら会う機会は無かったのだ。

俺は学校では明るく振舞うが、家では笑顔を见せない人間になっていった。

寂しいと感じた事もあるが構わなかった。

親しくなれば当然に粕谷みたいな事になってしまふ。

それだけは避けなければいけなかった。

さらにこの頃に気付いた事なのだが、人と話すのが苦手だと分かった。

それは「本当の自分を見せたくない」という思いよりも、人と話すのが怖かったのだ。

俺の姉も母も気が強い。

小さい頃は自分が正論を言っても、直ぐに何倍も反論されたので、誰に対しても何も言えなくなっていた。

だから『本当の自分を見せたくない』と思ったのも、『言いたい事が言えない』という所から来ているのかもしれない。

（もし恋人が出来たら、その人の前だけでは素直な自分でいう）

そう思いながら一年生は終わっていった。

福田洋子（ふくだようこ） 5

二年のクラス替えは淡い期待をしていた。

律子さんや清子と同じクラスになれたら良いなあと、女々しく思っていたからだ。

しかし神様は皮肉なもので、どちらとも一緒にはしてくれなかった。そのせいだろうか・・・二年のクラスメートは一年からの『きけちゃん』しか覚えていない。

ただ一番記憶に残る出来事があった。

二学期だったかな・・・。

帰りのホームルームが終わり席を立とうとした俺に担任の滝沢先生が声を掛けてきた。

「郡司、この間やった学力テスト、学年トップだったぞ」

「本当ですか？ 何の教科ですか？」

「馬鹿！総合だよ」

（今日はエイプリルフルだっけ？）

率直に思った事だった。

俺なんかが総合トップなど取れるわけ無いのだ。

しかし順位表を見て事実だと認識した。

五教科の内二教科がトップで、残りの三教科もトップスリーに入っていた。

もう何度目だろう・・・粕谷とヨツパに感謝をした。

これだけ覚えているのはやはり、それだけ嬉しかったからだ。

二年前までは中学でワースト十だった俺が、高校では学年トップになったのだから。

それともう一つ記憶に残る事がある。

それは二度目の恋だった。

きっかけは単純だった。

俺はマネージャーの福田洋子と、よく話をする様になっていた。

一年の時に同じクラスで隣の席だったのが影響している事は確かだった。

二年の時は別クラスになったが一番仲良しのマネージャだった。

ただの友達であつた。

そんなある日、ふと一年の時の記憶が蘇ってきた。

（そういえば入学初日に・・・先の事なんて分からないから藤野と付き合うかも・・・なんて考えたっけ）

そんな事を考える内に俺は彼女を意識し始めてしまった。

そして（違うクラスになったんだ）という寂しさが、日毎に強く胸を占める様になった。

もつと彼女と話をしたくて共通の話題を探っていた。

すると彼女は父親の影響で大の巨人ファンだった事を突き止めた。

俺は胸の中でガッツポーズをした。

俺は埼玉県民で関西とは何の縁もないが、大の阪神ファンだったのだ。

巨人と阪神と言えば「伝統の一戦」だ。

これは使えると思った。

バース、掛布、岡田がクリーンナップを打ち、日本一に輝いたのは、もう三年前の話だが、そんな事はどうでも良かった。

彼女と共通の話題が持てるだけで嬉しかったのだ。

こうして俺から野球の話題を毎日したおかげで、いつからか彼女からも積極的に話しかけてくれる様になってきた。

（機は熟した）

そう思った俺は六月の中旬、手紙ではなく言葉で彼女に告白をした。

なぜドラえもんはいないのだろう・・・。

せめて何故タイムマシンはないのだろう。

あればこの時の俺に声を掛けてあげたい。

「はやまるんじゃない」と・・・

とにかくこの時の告白がきっかけで、二人は付き合う様になった。半年後のクリスマスイブ。

俺は初めて女性と二人でデイズニーランドに行った。

その時の写真は今でも持っている。

その帰り道、彼女の最寄の駅の人気のない所で、互いにファーストキスをした。

勉強も恋愛も順調だった。

しかし部活はいまいちだった。

俺はレギュラーだった。

先発として出場していたが、ただ単に体力があるというだけの理由だったに違いない。

現に後輩の方が上手い奴がいた。

俺のプレイはパスやパスカット等の地味なプレーが多かった。

それは誰に言われたわけでもなく、シュート率の低い俺が生き残る為に考えたプレーだ。

だからと言ってシュート練習をやらなかったわけではないし、むしろ皆よりも多くやっていただろう。

部活中の休憩も休まず、部活後は居残り、休みの日には母校の瑠璃中のグラウンドにあるバスケットリングで練習をした。

色々な本を読んだり、高校生の試合を見たりして、何度もフォームも変えたが全く上達しなかった。

やり方がいけなかったのか、それとも才能が無かったのかは今もって分からない。

更に悪い事に俺は部員から反感を買う様になった。

恋人の福田洋子にのめり込み過ぎて、周りが見えなくなっていたのだろう。

もちろん部員は俺達の交際を知っている。

それを承知した上でも目に余る事が多かったのだと思う。

ただ悪い事は重なるもので俺は右膝を痛めてしまった。

殆ど曲がらなくなってしまったのだ。

正座はもちろんのこと体育座りも出来ず、通学に使っていた自転車さえも、ともに漕げない状態だった。

原因は膝の骨が出っ張ってしまい、神経を圧迫しているとの事だった。

た。

取り敢えず電気療法を試みるが、それでも治らない場合は手術との事だった。

俺は怪我を誰にも知られたくなかった。

部活中もこっそりと鎮痛剤のスプレーを人知れず吹きかけていた。

電気療法のおかげで以前に比べれば痛みは和らいたが、激しい運動は難しかった。

選択を迫られた。

治療を続ければ痛みが治まるのも遠くはなさそうだ。

ただプレーに自信がない。

仲間とも噛み合わなくなってる。

今なら怪我を理由に退部する事が出来る。

（部活を辞めよう・・・）

一度はそう決意したが出来なかった。

逃げるみたいで嫌だったし、何よりもバスケを続けたかったのだ。

俺はキャプテンと副キャプテンだけに膝の故障を告げた。

今まで俺を敬遠していた二人は「大丈夫か？無理するなよ。辞める事は無いよ」と心配してくれた。

それが例えポーズだったとしても、退部の決意を却下させるには十分だった。

膝は歳を重ねた今でも時々痛むが、プレーには差し支えの無い所までは復活した。

いつの間にか仲間とのわだかまりも解けた様だった。

こうしてそれなりに充実した二年生は終わりを告げた。

福田洋子（ふくだようこ） 7

三年のクラスメートは三年連続のきけちゃんと、一年の時の明彦、新しく出来た友達の敦^{あつし}や高野、その辺りと休み時間は話す様になった。

しかしこの頃の俺は『本当の自分を見せない様に』が悪化していた。休み時間は自分から誰かに話しかける事は無くなり、窓の外を眺めているか机の上に座りボンヤリと過ごす様になっていた。

自分から関わる事を完全に避けていた。

ただそれに反して一番思い出の多い高校生活も三年だったかもしれない。

世間で言えばテトリスが流行った年だ。

洋子と自由行動を過ごした修学旅行、二回戦負けをして悔しかった部活の引退、夏休みの就職活動、何をしたか覚えていない文化祭、二人三脚で転んだ体育祭、洋子と過ごせなかった年末年始、緊張した就職試験、涙を堪えた卒業式、そして何よりも卒業式後の富田先生へのお願いだった。

三年の担任も一年の時と同じく富田先生だった。

卒業式が終わり校舎内を洋子とうろついていた時、富田先生とすれ違った。

その時にこんな会話を交わした。

「先生、俺達必ず結婚するから、その時は仲人をやってね」

「バカ言ってんじゃないよ」

これは卒業してから六年後に現実となった。

高校を卒業をすると俺は飲食店で、洋子はデパートで働く様になった。

それからとにかくお金を貯めあった。
三十歳前には家を買いたかったからだ。

上司に恵まれた俺は失敗を繰り返しながらも確実に成長をしていき、
二十歳の時に同期ではトップの成績で店長へと上り詰めた。
物事は全て良い方向へと向かっていた。

そんな時に一つの別れは訪れた

予測できた別れであったが、やはり悲しみは深かった。

福田洋子（ふくだようこ） 8

確か・・・二十二歳の頃だったと思う。

八月のある日だった。

正確に覚えていないのは現実を認めたくなかったのかもしれない・・。

この日の話しをするには少し過去に遡らねばならない。

あれは俺がまだ幼稚園の頃だった。

川崎から瑠璃市に引っ越してきて、一年が経った頃だった。

俺は自宅近くの公園で一人で遊んでいた。

その公園にはブランコと砂場とちよつとしたグラウンドと滑り台があった。

滑り台は横長で子供なら十人くらいは同時に滑れそうだった。

俺がブランコに乗り一生懸命にこいでいると、いつの間にか賑やかな声が聞こえてきた。

辺りを見回すとブランコの上に大きな男が二人いた。

（大きい男といっても所詮は幼稚園児の目線。実際には小学二、三年生くらいだろう。）

その二人組みは何かを抱えていて、どうやらそれで遊んでいるらしかった。

気になった俺は何気なくブランコの横を通ってみた。

二人組みが抱えていたのは大きな猫だった。

（再びだが所詮は幼稚園児の目線。その猫は子猫だった。）

動物好きの俺が子猫を見た時に思った事は、「可愛い」ではなく、「かわいそう」だった。

その子猫は子供の目から見ても明らかに弱っていて、尚且つ鼻血を出していた。

（そっかあ！あの人達が看病をしてあげてるんだ！）

純粹にそう思った。

しかし現実とは残酷である。

男の子達がとった行動は、猫の両手両足を掴み背中を地面に向けて、二m強の滑り台の上から落としたのだ。

子猫が弱っていたのは二人組みのせいだった。

俺には耐えられなかった。

しかし一人の幼稚園児が、低学年とはいえ二人の小学生に立ち向かっていくのは、小心者の俺には特に勇気がある事だった。

ただ目の前の光景は小心者の幼稚園児に勇気を与えるには十分だった。

「止めてよ！」

そう叫ぶと、滑り台の上から落とされフラフラになりながらも立とうとしている子猫を抱き抱えて、重みに耐えながらも力の限り走った。

「おい！何すんだよ！」

「持つてくんじゃねえよ！」

背後から声は聞こえてくるが追っては来ない様だった。

俺は子猫を抱き涙でクシャクシャに濡れた顔のまま家に駆け込んだ。

福田洋子（ふくだようこ） 9

「ママ〜！ 猫が・・・」

玄関に走り寄ってきた母に事情を説明した。
母はうつたえていた。

どうすれば良いか分からなかったのだろう。

この当時は近くに動物病院はなかった。

とりあえず母は子猫が骨折していない事を確かめると鼻血を拭きミルクを与えた。

「怪我が治るまでよ」と母は言った。
何せ団地だから猫は飼えないのだ。

この後の事は覚えていない。

ただ情が移った事もあり猫は居ついた。

後から聞いた話では母は父に相談したかったらしい。

ただ父が五日間帰宅しなかったので、相談をする事が出来ずに、情が移ってしまったと言っていた。

「チコ」となづけられた猫は元気になった。

いつも遊んでいた。

冬なんかは寝ている時に人の事を起こしてまで布団に入り込んでくるし、泣いている時はずっと側にいて頬を舐めていてくれた。

中二の頃

「流石に俺の高校受験までは生きてないだろうなあ。合格したらチコと一緒に喜びたかったな・・・」なんて思っていたら、ちゃんと生きていた。

高校の頃は

「流石に就職までは・・・」と思ったが、やはり生きていた。

就職後は

「成人式までは・・・」

淡い期待もあつたが、成人式まで生きれば十六年目だ。

人間の年齢にすると何歳かは分からないが、立派な老人だろう・・・
ところが生きていた。

「この猫は死なないんだ！」

そう錯覚を起こしてしまいそうになった俺の気持ちは分かってもら
えるだろうか？

しかしやっぱり生き物だ。

死は確実に近づいていた。

死への兆候は俺が二十二歳の四月辺りから見え始めていた。
チコは既に十八年は生きている。

最近は食事とトイレの時以外で、チコの歩いている姿を見ない。
俺のベッドの下奥の方で横になっているのだ。

最初は気にも留めなかった。

ただ八月に入った頃から変化が見え始めた。

チコの呼吸が荒いのだ。

体全部を使って呼吸をしている。

俺はチコの死が近い事を悟った。

八月の火曜日、俺も母も仕事が休みだった。

俺は職場のバイトと買い物に行く約束があった。

母はチコを病院へと連れて行った。

夜になりバイトと別れ帰宅した。

エレベーターの無い五階建ての団地。

俺は自宅までの階段を上っていた。

三階辺りで何かの匂いに気付いた。

独特の匂いだから悩むまでも無い。

お線香だ。

特に気にする事も無く階段を上がる。

四階・・・お線香の香りが強くなる。

ここにきてやっと香りの意味を理解した。

（チコは死んだんだ・・・）

それを認めたがらない様に反論が続く。

（きつと他の家のお線香だよ。だってチコが死ぬわけ無いじゃん！病院に連れて行くって言うてたじゃん！！）

そんな反論が却って空しい。

現に階段を一步進むたびに、香りは強まっていく。
でも望みは捨てなかった。

五階にはもう一家族、住んでいる。

（きつと隣の家だ）

そう思い五階まで上った。

隣の家のドアに鼻を寄せてみる。

何の匂いもしてこない。

自分の家のドアの前に立つ。

現実を受け止めるしかなかった。

あきらかに香りは我が家からだったのだ。
普段よりも重く感じられるドアを開けた。
玄関に入った途端に母が走る様に来た。

「チコちゃん・・・死んじゃった」

「チコちゃん・・・死んじゃった・・・」

母は涙も隠さずにそれだけ言うと、一時もチコと離れたくない様に居間へと戻った。

俺も続いて居間に入った。

居間の隅にはダンボールが置かれ、その横にはお線香が立ててある。箱の中には顔だけを出してタオルを掛けられているチコが眠っていた。

「今にも目を開けそう・・・」

よく使われる表現だが正にそうだった。

ただ寝ているだけの様に見える。

俺はタオルをめくった。

動物は死ぬと体が硬くなる。

チコには絶対に訪れない事だと思っていた。
体に触れるのが怖い。

この時でもチコの死を信じきれていなかったのだ。

ゆっくりと手を伸ばす。

指先が毛先に触れる。

今朝までと何も変わりはない。

やがて指は体に辿り着いた。

涙が一粒だけこぼれた。

チコには無縁だと思っていた感触を、間違いなく指先で感じていた。

俺は何度も何度も・・・何度も何度も体を撫で、タオルを掛けなお

し自分の部屋に戻った。

母の前だから堪えていたのだろう。

部屋に入った途端にダムが崩壊した。

泣き崩れ声を上げて泣いた。

しかし直ぐに泣き止んだ。

いつまでも飼い主が泣いていると、成仏できないと聞いた事がある。
最期は笑って送り出そう。

「ありがとう！さようなら・・・」

チコへの最期の言葉だった。

俺がチコの体を撫でている時、母はこんな風に言っていた。

「私が病院を出てから三十分もしない内に、苦しみながら死んでいったんだって・・・。こんな事なら病院に預けないで、今日は一緒にいてあげれば良かった・・・」

その時の俺には考える余裕が無かったが、今は自信を持って母の意見を否定できる。

チコは四ヶ月も前から死と闘っていた。

猫は死んだ姿を飼い主には見られたくない動物なのだ。

だから死を感じたチコは、人目のつかないベッドの下奥の方で闘っていた。

それは万が一命が尽きたとしても、ベッドの下なら見られずらいと考えていたのではないか。

それに、こうも考えられる。

「早く俺を病院へ連れて行ってくれ。もう苦しいよ。早く家族の目の届かない所へ・・・。それまでは絶対に死ねないんだ」

本当の所はチコにしか分からない。

例え違っていたとしても、俺はそうだと信じている。

だから病院から母が出て行った時に、緊張の糸が切れたのだろう。
直ぐにこの世を去ったのだ。

もし病院に連れて行かなければ、チコはもっと生きたかもしれない。
でもそれは苦しみと共にだ。

もつと早く病院へ連れて行けば良かった。

あんなにも苦しい思いをさせてしまうなら、安楽死という方法だっ
てあった。

出来る限り生かしたいと願うのは、完全に人間のエゴなのだろう。

「チコ・・・ごめんね・・・そして、ありがとう・・・」

やはり可愛がっていたペットの死は悲しい。

「もう辛い思いをしたくないから、二度とペットは飼わない」

そう考える人がいるのも分かる。

ペットを飼った所で別れは必ず来る。

それに前のペットとの思い出を重ねてしまつかもしれない。

でも俺は機会があれば、また猫を飼いたい。

別れは辛い、その辛さを乗り越えられるだけの、たくさんの思い出をもらえる。

だからいつか、また猫を飼いたいと思う。

・・・格好悪いな・・・

言っている事と行動が伴っていない。

今の俺は何をしているのだろう・・・。

話しは変わるが高校卒業後、洋子との間には

紆余曲折はもちろんあったが、二人は結婚する事となった。

一九九五年の五月、俺と洋子は結婚をした。

付き合ってから約八年経ったが、実は二人とも体の関係は無かった。最初は洋子が怖がっていたからだ。

それなら結婚するまでお互いに「初」はとっておこうとなったので、結婚初夜は文字通りの初夜となった。

そして式の二日後にはオーストラリアへと新婚旅行に飛び立った。

オーストラリアは洋子の要望だった。
その頃の俺には行きたい国など無かった。
今ならペルーに行ってみたいが・・・。

オーストラリアではケアンズで買い物をし、今は禁止されているエアーズロックの頂上にも登った。

エアーズロックは唯一の俺の要望だった。
地平線を見るのが夢だったのだ。

頂上から見る地平線は実に綺麗だったし、地峡が丸いという事も実感させられた。

俺は両腕を水平に伸ばして、地平線に重ねながら深呼吸を繰り返した。

旅行から帰ると新車と中古車を一台ずつ購入もした。

式の費用も旅行も車も全てキャッシュだ。
それでも貯金はそれなりの額が残っていた。順風満帆の様に思えた。
ただ影は既に一部を覆っていた。

俺という人間 1

新婚旅行の三日目の夜

結婚してから五日目の夜である。

俺は洋子の布団へと潜り込んだ。

あからさまに洋子は嫌な顔をした。

「何でそんな顔するの？」

「だって・・・また、するんでしょう？」

俺は初夜から毎晩、洋子を抱いていた。

「うん、ダメなの？今日は疲れちゃった？」

「ダメじゃなくてイヤなの」

「何で？」

「だって痛いんだもん」

申し訳ないが男には分からないし俺は自分勝手だったかもしれない。でも付き合ってから八年も我慢してきたのだから、痛み付きになつてしまうのも当然だと正当化する自分もいた。だから俺は食い下がった。

「俺には痛みは分からないけど、数をこなさないとダメなのも確かじゃない？それに新婚なら尚更に毎晩の様にするものだと思うけどなあ・・・」

自己防衛かもしれないが、至って一般的な意見だったと思う。
ただその次の洋子の発言というか激しい態度に、俺は自分が萎縮していくのが分かった。

「ああゝ！新婚なら毎晩の様につて誰が決めたんだよ！ふざけんじやねえよ！」

今までにも洋子の激しい態度は見た事があるがここまでではなかったし、大抵そういう時は完全に俺に非がある時だった。

（この人にも自分の意見を言えないのかもしれない・・・本当の自分を見せてはいけないのかもしれない・・・）

この時に感じた気持ちは洋子と過ごしていく日々の中で、あながち間違っではないなかったと思い知らされていく事となった。

そしてこの一件以来、洋子に対しての性欲は

完全に消え去り、夫婦の営みは月に一回となった。

普通の人からすれば「そのくらい大した事じゃないよ」と思う事かもしれないが、俺の中では大きな痛みとなって残ったのだ。

そして「あの事件」が起きる。

あつ！「あの事件」の前にも忘れられない出来事があつたんだ。
先ずはそれから話します。

俺という人間 2

新婚旅行から帰ってきて二週間くらい経った頃だったと思う。

俺の仕事は飲食業だ。

関東を中心にチェーン展開している業界最大手の回転寿司の店長を任されていた。

店長の上には地区長と呼ばれる上司がいる。

店長は一店舗の責任者で、複数の店舗の責任者が地区長である。

その地区長からある日、仕事終わりにカラオケに誘われた。

「新婚なんで・・・」と断ったからといって出世に響く様な会社でもなければ、物分りの良いその上司が怒る分けでもない。
でも断る事なんて考えていなかった。

断らない主な理由は三つある。

一つ目はストレス解消だ。

俺の唯一の解消法はカラオケなのだ。

店長というのは見た目以上に大変で、非常にストレスが溜まるものである。

更に高校生のバイトが多い為に、高校までの俺の性格ではバイトは付いてこない。

俺は偽りの俺を演じていた。

それも大きなストレスだった。

だから独身時代は高校生のバイトを誘って、頻繁にカラオケに行き解消をしていた。

二つ目は上司の誘いだからだ。

いくら出世に関係ないといえど、

頻繁ではない上司の誘いを無下に断るわけにはいかない。

それに外回りなどをする営業の方達とは立場は少し違う気もするが、

俺だってサラリーマンなのだ。

三つ目はスキンシップ。

酒が入らないと言えない愚痴や相談だってあるし、カラオケなら高校生のバイトや部下だって来る。

そんな時こそ互いに交流を深める機会でもある。

ただのカラオケでも楽しみとストレス解消と親睦会を兼ねた物なのだ。

だから俺は行く気満々だった。

ただ時間が気になった。

仕事は夜の十時前後に終わる。

誘いを受けたのも十時過ぎだった。

俺は急いで自宅に電話を入れた。

「あのー、結婚式に呼んだ地区長がね、これからカラオケに行こうって誘ってくれたから行きたいんだけど・・・」

「ふざけんなよ！こっちはメシ作って待ってんだよ！今夜は帰ってくんな！」

ガチャン！

受話器を叩きつけた様に電話は切れた。

俺は地区長の誘いを断り急いで帰宅した。

俺という人間 3

家に着いた俺は鍵を開けドアノブを回した。

ガチャ！

やられた！

ドアチェーンまで掛けられていた。

呼び鈴を押してしばらくするとチェーンを外す音が聞こえたのでドアを開けた。

「あら、帰って来ないんじゃないの？ 自分勝手に良いわね・・」

「おかえり」の代わりに掛けられた言葉だった。

このままではいけないと思った。

自分の意見は言わねばならない。

そう思った俺は居間に座ると洋子を呼んだ。

「あのね、急に予定が入ったのは悪いと思うてるけど、カラオケだつて仕事の一環なんだよね。だからああいう態度は良くないと思うよ。それに月に一回位のペースなんだから、大目に見てくれないかなあ？」

「何が仕事の一環よ！遊んでるだけじゃないの！」

俺は単なる遊びじゃないと、先に述べた三つの理由を説明した。

「私には仕事の一環なんて全く分からない！ 偉そうに口実を作ってるけど結局は遊んでるだけでしょ！ こっちはメシ作って待ってるんだよ！ 私は接待の多いサラリーマンと結婚したわけじゃない！」

！
」

何だか疲れてしまった・・・。

俺は話を打ち切り夕飯を食べ始めた。

この日から三日間、会話も食事も無かった。

四日目に改めて話を聞いた。

どうやら洋子が言わんとしている事は「当日の急な誘いは食事を作って待っている者からすると迷惑だ」との事らしい。

俺の職場は学生の長期休日を狙って「春」「夏」「年末か年始」と、年に三回だけ夜通しで宴会を開いていた。

それ以外の誘いは全て当日だ。

その全てを断り続ける日々が続いた。

ある時は今は遠方に住んでいる元バイトが、俺とカラオケに行きたいが為にわざわざ二時間も掛けてきてくれたのに、当日の誘いだつた為に断らざるを得なかった。

その内に誰からも誘われなくなった。

直属の部下は毎日の様にバイトや上司とカラオケに行っていた。きっと被害妄想だと思うが職場で孤立している様に感じられた。

俺は年に三回の宴会しか交流の場がなくなってしまった。

ちなみに洋子は月に一回程度の割合で、食事会だか何だかをしていった。

『当日の誘いが無理なら予定を立てて』とか、『もっと強く言うておけば』など今も当時も浮かんではいたが、出来るだけ波風は立てなくなかった。

それに正当な理由を出したにしても、また理由をつけては怒鳴られそうでイヤだった。

俺は平穩無事に過ごしたかった。

しかしもつと言い合えば良かったと思う。

一つ一つの問題に対して、どちらも歩み寄る様な結論を出していけば良かったと思う。

ただ洋子は自分の意見を曲げないタイプであり、俺は争いを避けたタイプだったので、話し合いが始まって俺が途中で折れるのがパターンだった。

でもそれは良くない事だった。

空気を入れて膨らませる風船でさえも、入れ続ければ破裂するものだ。

こうした新婚生活の中、「あの事件」が起きるのだった。

結婚して二ヶ月くらい経った頃、ある事件が起きた。

俺は「風呂事件」と呼んでいる。

我が家にはお風呂に入る優先順位はないが、帰宅の遅い俺の方が後に入る事が多い。

ただ週に二回は先に入る。

そんな時に「風呂事件」は起きた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9740o/>

君がくれた鍵

2010年11月18日14時06分発行